

〔研究ノート〕

岡田為恭の模写―「善教房絵詞模本」をめぐる―

江戸時代後期に活躍した岡田為恭(文政六年～元治元年/1823～64)は、京都の狩野派の家に生まれますが、大和絵に傾倒し、古画学習を通じて独自の画風を打ち立てます。若い頃には自ら冷泉姓を名乗ったことから、冷泉為恭の名でも知られています。為恭と親交のあった国学者・西田直養の『篠舎漫筆』(天保十年/1839)には、当時十七歳の為恭がすでに学習している古画として八十九種の作品をあげています。

大和文華館蔵の為恭筆「善教房絵詞模本」は、現存する為恭の模写作品の中でも早く、天保十二年(1830)、為恭十九歳の時に手掛けたものであることが、巻頭の紙背にある落款「天保第十二年春二月十三日 奉拜書寫 御子左為恭時年十九」(図1)から分かります。原本である「善教房絵詞」(サントリー美術館蔵)は、鎌倉時代末頃の制作と考えられています。墨のみを用いる白描の手法で表されており、やや稚拙味のある軽妙な描写に特徴があります。絵画の余白の部分には登場人物の台詞が書き込まれており、台詞の順番が分かるように、番号が打たれています。詞書と絵画を交互に配するのではなく、絵画の中に台詞を中心とした詞を書き込んだものは画中詞と呼ばれます。

善教房絵詞の内容は、善教房という僧侶が貴族の邸宅を訪ね、邸内の女房たちや料理人、主人の三位中将などと対話し、殺生や奢侈の罪を説き、念仏をすすめるというものです。人々が素直に善教房の教えに耳を傾

けるのではなく、時に激しく反論する点に面白さがあります。女房たちが膳棚の傍で酒を飲む場面、原本(図2)と為恭の模本(図3)を比べると、こっそりと酒を飲もうとする女房たちの仕草や表情などがよく写し取られていることが分かります。また、人物の周囲に細かく記される台詞の書体も大変丁寧に写しており、為恭の書の巧みさも伝わってきます。十九歳という若さで高い模写技術を為恭が持っていたことが分かりますが、炊事場の場面では原本(図4)と異なり、為恭模本(図5)の料理人の烏帽子が完全に黒く塗りつぶされていないことから、大和文華館蔵の為恭模本は完成品ではなく、手元に残しておく紛本的な存在であったことが窺えます。模本の紙継部分に「冷泉倉」と記されていることも、控えとして為恭が所蔵していたことを裏付けます。逸木盛照『冷泉為恭の生涯』(便利堂、1956年)に載る為恭年表によると、天保十二年三月四日、長沢伴雄が徳川治宝の命により、善教房草紙絵(善教房絵詞)を為恭に模写させたといっています。逸木盛照氏は、為恭が晩年に身を隠していた粉河寺の住職であり、為恭の研究や、為恭と交流の深かった天台僧願海の研究で知られています。この年表の記載のもととなった文献について記されていないため、出典を確認できていませんが、大和文華館蔵の模本と同じく天保十二年に為恭が紀州藩主徳川治宝のために「善教房絵詞」を模写したことが事実であれば、完成品の手元に残し、後者が現大和文華館の所蔵品であるということが考えら

れます。

徳川治宝は有職故実への関心が高く、国学者の長沢伴雄に命じて、様々な古書の書写や古画の模写などを行わせていました。治宝が長沢伴雄に命じた古画の模写としてよく知られるのが、当時鷹司家の所蔵していた「春日権現験記絵」(現宮内庁三の丸尚蔵館蔵、鎌倉時代)の模写です。伴雄は天保十三年に命を受けたものの、鷹司家本の借用がなかなか許されず、翌年ようやく借りることができたことや、夜昼なく作業が行われたこと、弘化二年(1845)に模写を完成し治宝へ献上したことなどが、『南紀徳川史』舜恭公「故実有職御熱心之事」項や、伴雄の著書『絳石の落葉』に記されていることが亀井森氏によって指摘されています。伴雄は取りまとめ役であり、絵師として模写に参加したのが、原在明、浮田一憲、岩瀬広隆らと為恭でした。長沢伴雄の日記『都の日記』の天保十一年七月二日条には、「冷泉三郎といふ男とひ来る。五歳より画をよくかきて、古画類あまたうつしたりとかたる。当時十八歳也。いとおもしろき志のある男也。」と記されていることが土居次義氏により紹介されており、その内容から、この日に初めて伴雄と冷泉三郎、つまり為恭が会ったことが窺えます。伴雄の日記には為恭が古画模写を多くしていることが記されており、為恭の模写技術の高さを知った伴雄が徳川治宝の命による模写に、まだ若い為恭を抜擢したものと考えられます。

古画の模写を通じて為恭は画技や有職故実の知識を磨き、自身の絵画制作に活かしました。為恭

の学んだ古画には濃彩のものだけでなく、白描の作品も多く含まれています。「善教房絵詞」と同様に鎌倉時代末頃の制作であり、画中詞形式の白描物語絵の優品である「尹大納言絵巻」(福岡市美術館蔵・図6)には、この作品の絵を尹大納言妻、詞を尹大納言師賢筆とする為恭の識語が附属しており、「尹大納言絵巻」も為恭は目にしていたことが分かります。「善教房絵詞」の原本の箱書には、「後光厳院宸翰絵草紙」とあり、為恭模写の最後に「後光厳院宸翰」と記しており、原本を後光厳院による作品と認識していました。専門の絵師による精緻な描写の白描の絵巻だけでなく、教養のある高位の貴人による軽やかな白描の表現も為恭は積極的に学んでいたといえます。為恭の描いた作品の中には、尊敬する願海が高山寺に寓していた時の生活を、為恭の夢の中の出来事という形で幻想的に描いた「石雲清事」(個人蔵・図7)という作品があります。台詞ではありませんが、場面説明や登場人物の説明などが画中に記されており、絵は墨のみで軽妙に表されています。貴人が手遊びで描いた、謂わば私的な白描物語絵の描法を、親しい願海や自分自身も登場する絵巻を表すときの描法として意識するところがあったのではないのでしょうか。(宮崎もも)

※図2・4は、『サントリー美術館百選』(サントリー美術館、1981年)より、図6は『角川絵巻物総覧』(角川書店、1995年)より、図7は『復古大和絵師為恭一幕末王朝恋慕』(大和文華館、2005年)より複写致しました。

図1

天保第十二年春二月十三日
奉拜書寫
御子左為恭時年十九

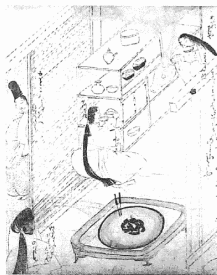


図2

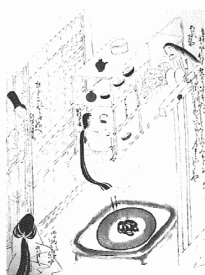


図3



図4



図6



図5



図7